

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月4日(火)
部 会 名	中学校 特別活動部会

研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実
(含む社会に開かれた教育課程の実現)

テーマ

『主体性を育む赤羽中学校の特別活動』

提案概要

本実践では、生徒一人一人が学校行事に主体的に関わり、成功体験を積み重ねることで「主体性」を育むため、体育祭と合唱祭を中心とした特別活動の取組を行った。実際に実施した取組は、以下の三つである。

①リーダーの選出と役割分担

行事を生徒主体で進めるため、実行委員だけに役割を集中させず、体育祭では種目係、合唱祭ではパートリーダーなどを設け、多くの生徒が様々な立場から活動に関われるようにした。また、リーダー以外の生徒についても、フォロワーとして主体的に行動することを意識できるよう働きかけた。

②リーダーミーティングの実施

行事の運営に向けて、実行委員や各係の生徒が集まり、役割や活動内容、分かりやすい指示の方法などについて綿密に話し合った。事前に十分な準備やリハーサルを行うことで、生徒が自信をもって活動できる環境を整えた。

③生徒主体の特別活動運営

体育祭の練習や競技の作戦会議、合唱祭の放課後練習やリハーサルなどにおいて、教員が必要以上に前に出ず、生徒が中心となって活動を進める場面を意図的に設定した。その結果、体育祭・合唱祭ともに多くの生徒が「主体性をもって取り組むことができた」と回答し、学年が上がるにつれて「よくできた」と回答する生徒も増加した。また、体育祭での経験が合唱祭での主体的な取組にも生かされるなど、経験の積み重ねによる成果も見られた。

一方で、活動のきっかけを作るのは依然として教員側であり、生徒から「こうしたい」という自発的な一歩を引き出すことが今後の課題である。また、リーダーミーティング等に伴う教員の時間的負担も課題となった。今後は、ICTを活用した共同編集や異年齢交流などを取り入れ、生徒同士の関わりの中で主体性を育むとともに、学校行事で培った力を日常の授業づくりや学級づくりへつなげていきたい。

質疑応答

Q. PAについて、保護者参加型の事例を教えてください。

A. パイプラインを行った。児童たちは経験したことが有り、ルールもわかっているので取り組みやすく、保護者の方々も楽しんでくれた。授業参観の時期は、10、11月頃。

Q. 年間を通して、PAを計画的に行われたということですが、特活の時間を何時間使われましたか。

A. 35時間のうち、4月のクラス作りの時期は週一で行ったが、以降は週二、もしくは月一で行

い、かなり時間を費やしたが、委員会の時間や行事の時間も含めて 35 時間で納めていた。

Q. PA 以外の学級活動の実践を教えてください。

A. 行事ごとの決めごと、クラス目標について決めたりした。

協議の柱及び協議概要

小学校・中学校共通【特別活動を日常の授業づくり、学級作りに活かすために】

- ・ 特別活動で育てた力を、日常の授業や学級生活につなげていくことが課題である。
→ 行事や学級会、集会活動等で得た経験を日常の授業や学級生活に生かせるよう、教師が意識して声をかける。
- ・ PA を軸とした活動を通して、互いを理解し、安心して過ごせる学級づくりを進めている。
→ 合意形成の経験を積み重ね、安全基地となるような学級をつくる。
- ・ 国語のスピーチや話し合い活動、数学の学び合い等で、特別活動で培った力を生かしている。
→ 相手の考えを聞く力や、自分の考えをまとめて伝える力を育て、相互理解や円滑な学び合いにつなげる。
- ・ 学級会や集会活動の経験が、行事への自発的な取組や協力、授業中の主体的な参加につながっている。
→ 特別活動での成功体験を積み重ね、様々な場面で主体的に活動する姿につなげる。
- ・ 特別活動で活躍した子どもが、学級の中でも自信をもち、役割や立ち位置を広げている。
→ 子どもたちに出番や役割を与え、様々な立場を経験することで、社会参画への意識や他者を思いやる力を育てる。
- ・ 行事で発揮された力を、日常の学級づくりや授業づくりにも生かしていきたい。
→ 合唱コンクール等で培った力や、相手の気持ちに寄り添う姿を教師が言葉にして価値付け、安心して主体的に学べる学級づくりにつなげる。

まとめ概要

今回の協議では、プロジェクトアドベンチャー（PA）を通して人間関係を形成する実践や学校行事を生徒主体で進める実践について意見交換を行った。PA の活動を通して、特別活動で育成を目指す「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点を意識することや、年間を通して意図をもって特別活動を計画し、その目的を子どもたちと共有することの重要性が確認された。

また、特別活動を特別活動だけで終わらせず、日常の授業や学級づくりと関連させながら取り組むことの必要性についても話し合われた。PA を実際に体験する中では、参加者同士の表情が次第に和らぎ、自然な会話や交流が生まれたことから、子どもたちにとっても互いを知り、理解し合う機会につながることが期待される。

さらに、AI や一人一台端末が普及する中で、学校という集団の場だからこそできる「他者との対話や協働」の価値が改めて確認された。今後は、教師が一方的に教えるだけでなく、学びの場をデザインし、調整・支援する役割を担いながら、主体性、成功体験、合意形成、相互理解を育む特別活動を、教育課程全体の中で意図的・系統的に進めていくことが求められる。